イスラーム世界研究　第6巻（2013年3月）195–230頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 6 (March 2013), pp.195–230

知の先達たちに聞く（6）

――永田雄三先生をお迎えして――

2012年7月20日（金）、永田雄三先生を京都大学にお招きし、「知の先達たちに聞く――永田雄三先生をお迎えして――」と題して講演会を開催した。

永田先生は、オスマン史研究の第一人者として長年学界をリードしてこられたが、とくに、17・18世紀を中心として地方社会に権勢をおよぼした「アーヤーン（地方名士）」に関する体系的研究を常に先導した研究者として位置づけられている。

従来の研究史においてアーヤーンという存在は、簡潔に述べれば、「農民を搾取する悪しき地主」、あるいは「地方で権力を振りかざした」といったマイナスイメージで論じられており、トルコ人研究者もアーヤーンのことを低く評価する傾向にあった。こうしたなかで、永田先生は一次史料に基づいて、カラオスマンオウルというひとつのアーヤーン家系に関する多角的な考察をおこない、従来のアーヤーン像を塗り替えられた。

研究の集大成となる著作が、2009年に日本語で出版された『前近代トルコの地方名士―カラオスマンオウル家の研究』（刀水書房）である。ここではとくに、徴税請負制の権利を得、あるいはチフトリキという農場の経営をおこない、そしてそこから得た富を地域社会に還元するというカラオスマンオウル家の諸活動の実態を、史料にもとづき詳らかにされた。その結果、同家系がマニサを中心とした地方社会の持続可能な発展を牽引したことを見事に実証されたのである。同時に、どのような種類の史料に依拠して、どのような手法で分析をすれば、アーヤーンの権力基盤や諸活動を解明できるのかといった、いわばアーヤーン研究の方法のひな形をも示された。上述の著作を含め、永田先生のこれまでの様々な業績は、今後アーヤーン研究を志す人が必ず参照すべき研究である。

加えて永田先生の研究は、一つのアーヤーン家系の研究にとどまるものではない。常に世界史の中にオスマン朝を位置づけることが意図されている。アーヤーン研究の文脈においても、世界史的な視点から、オスマン史におけるアーヤーンを、日本の豪農、イギリスのジェントリ、中国の郷紳と比較する比較名望家論を提示され、問題提起をおこなわれた。

当講演会では、上述の様々な問題意識を含む永田先生のご講演を中心に、参加者を交えての活発な質疑応答が交わされ、40年を超える永田先生の研究生活にもとづく豊富な学識、学問に対する真摯な態度などの一端に触れることができた。また先生の語り口は大変ウィットに富んだものであり、この点でも聴衆を大いに魅了した。この記事はこうした貴重な講演会の模様を再現したものである。以下、講演会記録に移る前に、永田先生の略歴と業績を記す。

永田雄三先生――略歴と業績――

1939年　3月29日　東京都墨田区に生まれる
1954年　4月　1日　東京都立北豊島工業高等学校電気通信科入学
1957年　3月31日　同高校同学科卒業
1957年　4月　1日　島田理化工業株式会社入社
1959年　3月31日　同社退社
1960年　4月　1日　千葉大学文理学部人文科学学科東洋史学専攻入学

1964 年　3 月 31 日　同大学同学部同学科同専攻卒業
1964 年　4 月　1 日　慶應義塾大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程入学
1965 年 10 月　1 日　トルコ国立イスタンブル大学大学院文学研究科博士課程入学
1969 年　5 月 30 日　同大学院博士課程修了（学術論文受理、Ph. D.）
1970 年　3 月 31 日　慶應義塾大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程修了
1970 年　4 月　1 日　日本学術振興会奨励研究員（東洋文庫）
1970 年　6 月 30 日　同研究員辞退、東洋文庫研究員（～現在）
1971 年　7 月　1 日　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1975 年　4 月　1 日　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1985 年　日本中東学会理事（～ 2004 年）
1988 年　4 月　1 日　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
1988 年 10 月 18 日　トルコ歴史学協会連絡会員（Haberleşme Üyesi）（～現在）
1995 年　4 月　1 日　明治大学文学部教授（～現在）
1996 年　4 月　1 日　明治大学人文科学研究所の総合研究「歴史学と植民地」（～ 1999 年 3 月 31 日）代表
1999 年　5 月 31 日　トルコ共和国功労勲章受章
2003 年　4 月　1 日　明治大学人文科学研究所所長
（～ 2005 年　3 月 31 日）
2004 年　6 月 17 日　「日本におけるトルコ年」功労金メダル受賞
2007 年　4 月　1 日　日本・トルコ協会常任理事（～現在）

業績

（単）単行本、（論）論文、（翻）翻訳、（研）研究ノート・学会動向、（書）書評、（エ）エッセイ、（口）口頭発表要旨、（彙）彙報

1969 年

・（研）「トルコにおける汎イスラミズムの復活」『中東通報』166 号、1969 年 10 月、37 ～ 41 頁 .

1970 年

・（論）「アーヤーン層の社会経済史的考察―オスマン社会経済史研究のひとこま―」『後進国経済発展の史的研究―昭和 44 年度中間報告（その 1）』(所内資料　調査部 No. 44–28 大塚研究会 No. 3）アジア経済研究所、1970 年 3 月、109～182 頁 .
・（論）「トルコの近代化と文字」『歴史教育』第 18 巻第 7 号、1970 年 9 月、32～38 頁 .
・（研）「トルコにおけるオスマン朝史研究の近況」『オリエント』第 11 巻第 3・4 号、1970 年 9 月、161～181 頁 .
・（書）「シェラフェッティン＝トゥラン著『スレイマン大帝の王子バヤズィドの反乱』」『東洋学報』第 53 巻第 1 号、1970 年 6 月、94～103 頁 .
・（彙）「最近東洋文庫において蒐集されたオスマン朝史関係の文献及びマイクロフィルム（1）」『東洋学報』第 53 巻第 2 号、1970 年 9 月、01～10 頁 .

1971 年

・（論）「マフムート二世の中央集権化政策の一端：アーヤーン・デレベイ対策をめぐって」『オリエント』第 12 巻第 3・4 号、1971 年 4 月、149～168 頁 .

・（論）「トルコ語史料よりみたる 1770 年におけるモレア半島のギリシア人反乱」『史学雑誌』第 80 編第 7 号、1971 年 7 月、46～63 頁 .
・（論）「17 世紀初頭の東地中海貿易に関する―トルコ語史料」『史学』44 巻 1 号、1971 年 10 月、77～88 頁 .
・（論）「タンズィマート」護雅夫（編）『トルコの社会と経済』アジア経済研究所、1971 年、1～28 頁 .
・（論）「青年トルコ革命」護雅夫（編）『トルコの社会と経済』アジア経済研究所、1971 年、29～60 頁 .
・（研）「セルジューク朝・オスマン朝（イスラム講座 6）」『イスラム世界』8 号、1971 年 10 月、39～51 頁 .
・（エ）「民族のこころ（8）：トガン＝ホジャの涙」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』14 号、1971 年 12 月、31 頁 .
・（彙）「最近東洋文庫において蒐集されたオスマン朝史関係の文献及びマイクロフィルム（2・完）」『東洋学報第 53 巻第 3・4 号、1971 年 3 月、01～12 頁 .

1972 年

・（論）「トルコにおけるムスリム宗教運動に関する一考察―中間報告」『アジア・アフリカにおける宗教運動　共同研究報告 (II)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1972 年、1～32 頁 .
・（研）「西アジア史研究の現状（3）：1258 年以降の西アジア」『歴史と地理』206 号、1972 年 11 月、12～30 頁 .
・（書）「センジェル・ディヴィッチオウル著『アジア的生産様式とオスマン朝社会』」『東洋学報』第 55 巻第 1 号、1972 年 6 月、111～118 頁 .
・（彙）「トルコ民族とイスラム」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』17 号、1972 年 12 月、32～33 頁 .

1973 年

・（論）「トルコにおける前資本主義社会と『近代化』―後進資本主義の担い手層をめぐって―」大塚久雄（編）『後進資本主義の展開過程』アジア経済研究所、1973 年、139～188 頁 .
・（彙）「メブレビー教団のふるさとをたずねて」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』18 号、1973 年 3 月、7～9 頁 .
・（彙）「トルコ民族とイスラム」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』18 号、1973 年 3 月、25 頁 .
・（彙）「イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』20 号、1973 年 12 月、17～18 頁 .
・（彙）「トルコ民族とイスラム」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』20 号、1973 年 12 月、18 頁 .

1974 年

・（論）「18 世紀後半のトルコにおけるアーヤーン職制度に関する一研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』8 号、1974 年 9 月、31～71 頁 .
・（研）「オスマン朝のバルカン支配をめぐる諸問題―ティマール制に関する研究動向を中心として―」『「トルコ民族とイスラム」に関する共同研究報告　昭和 47・48 年度』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1974 年、66～86 頁 .
・（書）「Halil İnalcık, The Ottoman Empire: The Classical Age 1300–1600」『オリエント第 16 巻第 2 号、1974 年 3 月、157～161 頁 .
・（彙）「トルコ民族とイスラム」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』21 号、1974 年 3 月、21～22 頁 .

1976 年

・（単）*Muhsin-zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1976 (repr. İzmir: Akademi Kitabevi, 1995), 174 p.

・（単）*Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1976, 67 p.

・（研）「オスマン帝国社会経済史研究における遺産目録文書の重要性」『東洋学報』第 57 巻　第 3・4 号、1976 年 3 月、553～558 頁 .

・（彙）「トルコ・バルカン調査をおえて」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』26 号、1976 年 3 月、1～2 頁 .

1977 年

・（論）The *İltizam* System in Egypt and Turkey: A Comparative Study, *Journal of Asian and African Studies*（『アジア・アフリカ言語文化研究』）, No.14, Tokyo, 1977, pp. 169–194.（Abdul Rahim, Abdul Rahman と共著）

・（論）「16 世紀トルコの農村社会：1531 年付サルハン県「検地帳」分析の試み」『東洋学報』第 58 巻第 3・4 号、1977 年 3 月、041～071 頁 .

・（論）「オスマン宮廷に生きた女性たち」板垣雄三（編）『世界の女性史 14　中東・アフリカ（2）閉ざされた世界から』評論社、1977 年、89～116 頁 .

・（論）「オスマン帝国支配下のバルカン」矢田俊隆（編）『東欧史（新版）』山川出版社（世界各国史 13）、1977 年、99～129 頁 .

・（彙）「アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』30 号、1977 年 7 月、39～40 頁 .

1978 年

・（単）『トルコ語読本』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1978 年

・（単）『トルコ語常用語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1978 年

・（論）「トルコ」松本重治監修・板垣雄三（編）『中東ハンドブック』講談社、1978 年、62～73 頁 .

・（研）「オスマン帝国時代アナトリアの旅」『月刊シルクロード』6 号、1978 年 6 月、18～22 頁 .

・（彙）「ボズクルト・ギュヴェンチ教授」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』33 号、1978 年 7 月、13 頁 .

・（彙）「トルコ語研修について（昭和53年度言語研修報告）」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』34 号、1978 年 11 月、19～22 頁 .

1979 年

・（単）*Materials on the Bosnian Notables*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. 1979, iii+153p.

・（論）16. Yüzyılda Manisa Köyleri: 1531 Tarihli Saruhan Sancağına Ait Bir Tahrir Defterini İnceleme Denemesi, *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Dergisi*, Sayı 32, İstanbul, 1979, pp. 731–753.

・（翻）S. アルプ「イェシルウルマク河上流域の地理―マシャト＝ヒョユク出土のヒッタイト文書から」『オリエント』第 21 巻第 2 号、1979 年 3 月、57～69 頁 .

・（翻）ボズクルト・ギュヴェンチ「トルコにおける社会・文化変容：危極？それとも発展？」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』35 号、1979 年 3 月、11～18 頁 .

1980 年

・（口）「トルコ人のアイデンティティ形成とその多様化」『シンポジウム「中東の社会変化とイスラム化に関する総合研究―報告と討論の記録―（4）歴史分科会」1、1980 年 3 月、58～68 頁 .

・（彙）「『日本文化』をみやげにギュヴェンチさん再度来日」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』40 号、1980 年 11 月、20 頁 .

1981 年

・（論）「トルコ近代史の一断面―エフェ・ゼイベキたちのこと―」『イスラム世界』18 号、1981 年、36～49 頁 .

・（翻）ボズクルト・ギュヴェンチ「私の日本人観：文化人類学による一つの試み」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』41 号、1981 年 3 月、2～3 頁 .

・（翻）イセンビケ・アルジャンル「オスマン帝国におけるアシレトとユリュクとの区別」『東洋学報』第 62 巻第 3・4 号、1981 年 3 月、452～469 頁 .

・（翻）E. オクタイ , N. アクシト , E. Z. カラル『世界の教科＝歴史トルコ』、全 3 冊、ほるぷ出版、1981 年 .（編訳）

・（エ）「オスマン帝国 / トルコ共和国」三浦雄一郎監修『波動する世界：インド、イランの歴史 / 小アジア・バルカンの歴史 / エジプトの歴史（現代用語の基礎知識 81 年版付録）』自由国

1982 年

・（単）『中東現代史 I: トルコ・イラン・アフガニスタン』山川出版社（世界現代史 II）、1982 年、加賀谷寛（勝藤猛と共著）

・（研）「第 9 回トルコ歴史学会大会」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』44 号、1982 年 3 月、31 頁 .

・（エ）「民族のこころ（53）：“ 黄 ”・“ 白 ” 論争」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』46 号、1982 年 11 月、11～25 頁 .（『異文化との出会い　アジア・アフリカのフィールドノートから』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1994 年、170～172 頁に再録）

・（彙）「国際アタテュルク・シンポジウム」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』44 号、1982 年 3 月、38～39 頁 .

・（彙）「エミール・ボーエフ氏のことなど」『アジア・アフリカ言語吾文化研究所通信』45 号、1982 年 7 月、12 頁 .

1983 年

・（論）Türk Devrimi'nin Japonya'daki Yankıları, *Atatürk'ün Düşünce ve Uygulamalarının Evrensel Boyutları, 2 Kasım - 6 Kasım 1981 Uluslararası Sempozyum*, Ankara, 1983, pp. 165–186.

・（論）「アーヤーン層と地域社会―カラオスマンオウル・ヒュセイン・アガを事例として―」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、1983 年、735～760 頁 .

・（研）「18 世紀後半トルコの農場経営史料の分析」『アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究　昭和 57 年度共同研究プロジェクト報告 7』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1983 年、75～133 頁 .

・（彙）「トゥンジェル・バイカラさん」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』47 号、1983 年 3 月、5 頁 .

1984 年

・（論）「トルコの豪農地主と地域社会」佐藤次高・冨岡倍雄（編）『イスラム世界の人びと 2　農民』

東洋経済新報社、1984年、113～147頁.

・（論）「歴史上の遊牧民―トルコの場合」永田雄三･松原正毅（編）『イスラム世界の人びと3 牧畜民』東洋経済新報社、1984年、183～214頁.

・（エ）「東西の文明が出会った町：歴史の激動にもまれたイスタンブル」『週刊朝日百科　世界の地理　西・南ヨーロッパ：トルコ・キプロス』19号、1984年2月、246～249頁.

1985年

・（論）「前近代トルコにおける地域社会の形成とワクフ制度」慶応義塾大学東洋史研究室（編）『西と東と：前嶋信次先生追悼論文集』汲古書院、1985年、137～160頁.

・（論）「変貌するトルコの農村―マフムト・マカルはなぜ『おらが村1975年』を書いたか」矢島文夫（編）『アフロアジアの民族と文化』山川出版社（民族の世界史11）、1985年、436～453頁.

・（論）「西アジア封建社会論」木村尚三郎ほか（編）『中世史講座5 封建社会論』学生社、1985年、137～164頁.

・（彙）「東洋文庫・中央アジア・イスラム研究委員会編『東洋文庫所蔵　トルコ語・オスマン語文献目録（増補・改訂版）』財団法人・東洋文庫、昭和60年3月、794頁」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』54号、1985年7月、25～26頁.

・（彙）「『日本中東学会』の設立」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』54号、1985年7月、27～28頁.

1986年

・（論）「オスマン時代のシリア史に関する若干の覚書」『アジア・アフリカ言語文化研究』32号、1986年、211～230頁.

・（論）「歴史のなかのアーヤーン：19世紀初頭トルコ地方社会の繁栄」『社会史研究』7号、1986年12月、82～162頁.

・（論）「オスマン帝国とスラブ民族」森安達也（編）『スラブ民族と東欧ロシア』山川出版社、1986年、271～290頁.

・（論）「支配とエリート（2）」板垣雄三・佐藤次高（編）『概説イスラーム史』有斐閣選書、1986年、185～207頁.

・（翻）「メティン･アンド氏連続講話会」トルコ文化研究会（編）『トルコ文化研究』1号、1986年9月、23～33頁.（永田雄三通訳／江川ひかり記録）

・（エ）「トルコ人気質　その一側面」『中東研究』304号、1986年1月、38～46頁

・（エ）「トルコ史こぼれ話　17世紀イスタンブルの乱痴気」トルコ文化研究会（編）『トルコ文化研究』1号、1986年9月、125～134頁.

・（彙）「日本中東学会」『アジア･アフリカ言語文化研究所通信』57号、1986年8月、33～34頁.（上岡弘二と共著）

・（彙）「アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』57号、1986年8月、36～38頁.

・（彙）「アフメト・メテ・トゥンジョクさん」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』58号、1986年12月、36頁.

・（彙）「アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』58号、1986年12月、55頁.

1987 年

・（論）Notes on the Managerial System of a Big Farm (*Çifilik*) in the Mid-18th Century Turkey, *Annals of Japan Association for Middle East Studies*（『日本中東学会年報』）, No. 2, Tokyo. 1987, pp. 319–341.

・（エ）「敗軍の将は名を残さず」トルコ文化研究会（編）『トルコ文化研究』2 号、1987 年 10 月、95～102 頁 .

・（口）「日本－トルコ比較近代化論」トルコ文化研究会『トルコ文化研究』2 号、1987 年 10 月、1～8 頁 .

・（彙）「アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』60 号、1987 年 7 月、36 頁 .

1988 年

・（論）Karaosmanoğlu Hacı Hüseyin Ağa'ya Ait Tereke Defteri. *IX. Türk Tarih Kongresi, Ankara* 21–25 *Eylül 1981: Kongreye Sunulan Bildiriler*, Cilt. II. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 1988, pp. 1055–1062.

・（論）Greek Rebellion of 1770 in the Morea Peninsula: Some Remarks through the Turkish Historical Sources. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko - The Oriental Library*, No. 46, Tokyo, 1988, pp. 85–101.

・（翻）メテ・トゥンジョク「第一次世界大戦期イギリスの地中海への艦隊派遣要求と日本外交」『アジア・アフリカ言語文化研究』35 号、1988 年 3 月、29～44 頁 .

・（研）「日本オリエント学会第 29 回大会」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』62 号 1988 年 3 月、23～27 頁 .

・（エ）「オスマン帝国の歴史」『トルコ・トプカプ宮殿秘宝展：オスマン朝の栄光』、（財）中近東文化センター、朝日新聞社、1988 年、17～21 頁 .

・（エ）「敗軍の将は名を残さず　2」トルコ文化研究会（編）『トルコ文化研究』3 号、1988 年 10 月、74～78 頁 .

・（彙）「イスラム圏における異文化接触のメカニズム：市の比較研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』62 号、1988 年 3 月、36～37 頁 .

・（彙）「イスラム圏における異文化接触のメカニズム：市の比較研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』62 号、1988 年 3 月、36～37 頁 .

・（彙）「西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』62 号、1988 年 3 月、39～40 頁 .

1989 年

・（論）The Role of Ayans in Regional Development during the Pre-Tanzimat Period in Turkey: A Case Study of the Karaosmanoğlu Family, *Urbanism in Islam: The Proceedings of the International Conference on Urbanism in Islam*, Oct. 22–28, 1989, Vol. 1, Tokyo, 1989, pp. 166–191.

・（研）「日本オリエント学会第 30 回大会」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』65 号、1989 年 3 月、35～36 頁 .

・（書）「松原正毅著『トルコの人びと：語り継ぐ歴史のなかで』」『民博通信』45 号、1989 年 8 月、7～9 頁 .

・（口）「オスマン・トルコ語資料のデータ・ベース化をめぐって」『イスラムの都市性・研究報告（研究会報告編・第 7 号）』文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」事務局、1989 年、6～26 頁 .

・（口）「三文化圏の成立―パクス・オトマニカの理念とシステムをめぐって―」川床睦夫（編）『シ

ンポジウム「イスラームとモンゴル」』中近東文化センター（中近東文化センター研究会報告10）、1989年、122～134頁.

・（彙）「西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』65号、1989年3月、42～43頁.

1990年

・（論）The Decline of the Ottoman Empire's Doctrine of State Landownership: The Development of the *Çifilik* Type of Landownership, *The 17th International Congress of Historical Sciences, Chronological Section: Modern Period*, vol. 2, 1990, Comité international des sciences historiques.

・（論）Preliminary Report on the Managerial System of a Çifilik in Mid Eighteenth Century Turkey, Heath W. Lowry & Ralph S. Hattox eds., *IIIrd Congress on the Social and Economic History of Turkey, Princeton University 24–26 August 1983*, Istanbul: ISIS Press, 1990, pp. 93–96.

・（論）「パン・トルコ主義の基盤」板垣雄三（編）『シリーズ世界史への問い8 歴史のなかの地域』岩波書店、1990年、47～73頁.

・（論）「オスマン朝法制史料のコンピュータ分析のための予備的考察」『日本オリエント学会創立35周年記念オリエント学論集』刀水書房、1990年、397～414頁.

・（論）「トルコ系民族の発展―中央アジアから西アジアへ」護雅夫・岡田英弘（編）『中央ユーラシアの世界』山川出版社、1990年、175～208頁.

・（研）「International Conference on Urbanism in Islam (ICUI)」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』68号、1990年3月、45～47頁.

・（研）「日本オリエント学会第31回大会」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』68号、1990年3月、47～48頁.

・（エ）「イスラム世界と『ゆめ』3題（＜特集＞ゆめ）」『建築雑誌』105（1294）号、1990年1月、32～33頁.

・（エ）「最近のトルコ雑感（特集・1990年代の中東への視点）」『中東研究』339号、1990年1月、84頁.

・（エ）「オスマン帝国の最盛期」『週刊朝日百科　世界の歴史　展望：16世紀の世界1』66号、1990年2月、430～431頁.

・（エ）「オスマン朝再興の努力」『週刊朝日百科　世界の歴史　展望：17世紀の世界2』81号、1990年6月、525頁.

・（エ）「チューリップ時代」『週刊朝日百科　世界の歴史　展望：18世紀の世界1』86号、1990年7月、571頁.

・（エ）「サファヴィー朝の滅亡」『週刊朝日百科　世界の歴史　展望：18世紀の世界2』91号、1990年8月、589頁.

・（エ）「オスマン帝国の弱体化」『週刊朝日百科　世界の歴史　展望：18世紀の世界3』96号、1990年9月、623頁.

・（彙）「西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』69号、1990年7月、62頁.

1991年

・（単）『故嶋田襄平先生収集中央大学文学部東洋史研究室所蔵イスラム都市関係論文目録』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1991年.（松田俊道と共編）

・（論）「オスマン帝国における国家的土地所有の解体―チフトリキ型大土地所有の発展（第17回マドリード国際歴史学会議　近代部会報告）」『歴史学研究』618号、1991年4月、37～41頁.

・（エ）「湾岸危機とトルコの積極的外交政策」板垣雄三（編）『中東湾岸戦争と日本―中東研究者の提言―』第三書館、1991 年、224 ～ 231 頁 .
・（エ）「EC 加盟とイスラムの間で揺れるトルコ―相反する 2 つを追い求めるオザル政権のジレンマ」『世界週報』72-16、1991 年 4 月、16～19 頁 .
・（エ）「‘オザル敗北’で混迷深まるトルコ：新政権の課題は開放経済が生んだひずみの処理」『世界週報』72-45、1991 年 11 月、28～31 頁 .
・（エ）「西欧化と大トルコの夢とイスラーム復興の入れ子構造」板垣雄三（編）『中東アナリシス―湾岸戦争後の中東諸国事情―』第三書館、1991 年、189～212 頁 .
・（口）「町づくりの智恵」第 5 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会（編）『都市文明イスラームの世界：シルクロードから民族紛争まで』クバプロ、1991 年、153～162 頁 .

1992 年

・（論）Manisa Şerî Mahkeme Sicil Defterlerinden Bir Kaç Not, *Ankara Üniversitesi Osmanlı Tarihi Araştırma ve Uygulama Merkezi Dergisi (OTAM)*, No. 3, 1992, pp. 285-296.
・（論）Mukataa Sistemi ve Şam Eyaleti Mukataa Defteri, トルコ文化研究会（編）『トルコ文化研究』6 号、1992 年、60～65 頁 .（Mücteba İlgürel と共著）
・（論）「トルコ」松本重治監修・板垣雄三編『新・中東ハンドブック』講談社、1992 年、91～105 頁 .
・（エ）「アラビア文字史料のデータベース化とその活用」『学術月報』45-6、1992 年 6 月、588～594 頁 .
・（エ）「地方名望家とは何か？」『歴史と地理』447 号、山川出版社、1992 年 11 月、34～36 頁 .
・（エ）「都市の外部ネットワーク　商業ネットワークと都市　トルコ」板垣雄三・後藤明（編）『事典　イスラームの都市性』亜紀書房、1992 年、219～222 頁 .
・（エ）「都市の内部ネットワーク　宗教運動と都市　トルコ」板垣雄三・後藤明（編）『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992 年、338～339 頁 .
・（エ）「都市の内部ネットワーク　やくざ　トルコのやくざ」板垣雄三・後藤明（編）『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992 年、351～352 頁 .
・（エ）「イスラーム圏諸地域の都市　トルコ・バルカンの都市・総論」板垣雄三・後藤明（編）『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992 年、610～614 頁 .
・（エ）「イスラーム圏諸地域の都市　トルコ・バルカンの都市　イズミル」板垣雄三・後藤明（編）『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992 年、617～618 頁 .
・（エ）「イスラーム圏諸地域の都市　トルコ・バルカンの都市　サラエヴォ」板垣雄三・後藤明（編）『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992 年、619～620 頁 .
・（彙）「村誌『ヤタガン』の創刊」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』74 号、1992 年 3 月、14～15+68 頁 .
・（彙）「ミュジュテバ・イルギュレルさん」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』76 号、1992 年 11 月、6 頁 .

1993 年

・（単）『西アジア（下）』朝日新聞社（地域からの世界史 8）、1993 年 .（加藤博と共著）
・（論）「近世イスラム社会における地方名士の情報世界」『歴史学研究』651 号、1993 年 10 月増刊号、12～22 頁 .
・（エ）「オスマン古文書の世界（シリーズ・わたしの 5 冊⑨）」『中東研究』374 号、1993 年 1 月、39～43 頁 .

・（エ）「トルコ文化の特色（トルコの現代建築とアート＜特集＞）：（トルコの現代建築）」『SD』346、1993 年 7 月、54～56 頁 .

1994 年

・（論）Saraybosna Şeriyye Sicilleri üzerinde Bir İnceleme, *XII. Türk Tarih Kongresi Ankara: 12-16 Eylül 1994 Kongreye Sunulan Bildiriler*, Vol. 3. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 2001 (or 1999) , pp. 691–724.（永田真知子と共著）

・（論）The Waqf Foundation in the Social and Economic History of the Ottoman Empire, *Urbanism in Islam: The Proceedings of the 2nd International Conference on Urbanism in Islam: Nov. 17–29, 1990*, II. Tokyo. 1994, pp. 255–264.

・（論）「18･19 世紀ボスニア地方の人びと」『アジア･アフリカ言語文化研究』46･47 合併号､1994 年、437～473 頁 .（永田真知子と共著）

・（論）「18 世紀初頭オスマン＝サファヴィー戦争期のアレッポ市場圏」「イスラム圏における異文化接触のメカニズム」プロジェクト班（編）『「イスラム圏における異文化接触のメカニズム―人間動態と情報―3」』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1994 年、31～51 頁 .（斉藤美津子と共著）

・（研）「座談会「イスラム化」プロジェクトの回顧と展望（＜ 30 周年記念特集＞長期プロジェクト回想）」『アジア･アフリカ言語文化研究所通信』82 号、1994 年 11 月、1～15 頁 .（板垣雄三･三木亘・飯塚正人・上岡弘二・黒木英充・中野暁雄・林徹・日野舜也・家嶋彦一との対談）

1995 年

・（単）*Studies on the Social and Economic History of the Ottoman Empire*, İzmir: Akademi Kitabevi, 1995, 139 p.

・（論）「バルカンにおけるイスラームの拡大」堀川徹（編）『講座イスラーム世界 3 世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所、1995 年、347～382 頁 .

・（研）「座談会「トルコの民族と文化」をめぐって」『イスラム世界』45 号、1995 年 6 月、73～96 頁 .（小松久男・松原正毅・鈴木董・林徹との対談）

・（書）「加藤博著『私的土地所有権とエジプト社会』」『史学雑誌』第 104 編第 1 号、1995 年 1 月、99～111 頁 .

・（エ）「トルコ現代史の流れ」中東調査会（編）『1980 年以降のトルコの政治･経済構造』中東調査会、1995 年、1～13 頁 .

・（彙）「歴史研究と地域研究の間で」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』84 号、1995 年 7 月、50～52 頁 .

1996 年

・（研）「日本におけるトルコ研究小史」『季刊アナトリアニュース』86 号､1996 年 12 月､10～18 頁 .

1997 年

・（単）*Tarihte Âyânlar: Karaosmanoğulları üzerinde bir İnceleme*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi 1997, xxv+329 p.

・（論）「後期オスマン帝国の徴税請負制に関する若干の考察：地方名士の権力基盤としての側面を中心に」『駿台史学』100 号、1997 年 3 月、75～110 頁 .

・（書）「『3 民族と国家―自覚と抵抗』」（《歴史学研究会編『講座世界史』全 12 巻を読む（東京大学出版会）》）『歴史評論』566 号、1997 年 6 月号、48～52 頁 .

・（エ）「福祉党の躍進とトルコの将来」『現代の中東』22 号、1997 年 3 月、2 頁 .
・（彙）「護雅夫先生とイスラーム世界」『イスラム世界』49 号、1997 年 7 月、118～119 頁 .

1998 年

・（単）『成熟のイスラーム社会』中央公論社（世界の歴史 15）、1998 年（文庫：2008 年 5）.（羽田正と共著）
・（研）「学生のためのトルコ史研究案内」『明大アジア史論集』2 号、1998 年 3 月、85～118 頁 .
・（口）「コスモポリタンなイスラーム都市イスタンブルの祝祭（16・17 世紀）」明治大学人文科学研究所（編）『明治大学公開文化講座歴史のなかの民衆文化』風間書房、1998 年、203～259 頁 .

1999 年

・（論）「アレッポ市場圏の構造と機能」佐藤次高・岸本美緒（編）『地域の世界史 9：市場の地域史』山川出版社、1999 年、127～162 頁 .
・（論）「18・19 世紀サラエヴォのムスリム名士と農民」歴史学研究会（編）『地中海世界史 3　ネットワークのなかの地中海』青木書店、1999 年、172～201 頁 .
・（論）「商業の時代と民衆―「イズミル市場圏」の変容と民衆の抵抗―」『岩波講座世界歴史 15 商人と市場―ネットワークの中の国家―』岩波書店、1999 年、235～261 頁 .
・（研）「ロードス島のトルコ・イスラーム建築探訪記」中近東文化センター（編）『中近東職人・商人研究会会報』創刊号、1999 年 12 月、58～69 頁 .

2000 年

・（研）「第 13 回『トルコ歴史学大会』に参加して」『駿台史学』109 号、2000 年 3 月、149～156 頁 .

2001 年

・（研）III. Japonya-Osmanlı İlişkileri/IV. Ülkede İslâm ve Şarkiyat Çalışmaları, *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Cilt 23, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi Genal Müdürlüğü, 2001, pp. 574–576.
・（論）Karaosmanoğulları, *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Cilt 24, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfi İslâm Ansiklopedisi Genal Müdürlüğü. 2001, pp. 468–470.
・（論）「オスマン帝国における近代教育の導入：文官養成校（ミュルキエ）の教師と学生たちの動向を中心に」『駿台史学』111 号、2001 年 2 月、63～90 頁
・（研）「イナルジク（ハリル）」尾形勇・樺山紘一・木畑洋一（編）『20 世紀の歴史家たち（4）世界編 下』刀水書房、2001 年、317～329 頁 .

2002 年

・（研）Japonya'da Osmanlı Araştımalan, *XIII. Türk Tarih Kongresi, Ankara 4-8 Ekim 1999 Kongreye Sunulan Bildiriler*, Vol. 1, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 2002, pp. 459–477.
・（単）『西アジア史 II：イラン・トルコ』山川出版社（新版世界各国史 9）、2002 年.（編著）
・（論）「オスマン帝国の改革」永田雄三（編）『西アジア史 II：イラン・トルコ』山川出版社（新版世界各国史 9）、2002 年、281～327 頁 .
・（研）「ギリシアにおける「トルコ時代」史研究の一端」『駿台史学』115 号、2002 年 3 月、115～123 頁 .

2003 年

・（口）「トルコの村落―ヤタガン村の事例から（シンポジウム村落史研究―歴史の基層―）」『駿台史学』117 号（50 周年大会特集号）、2003 年 2 月、87～97 頁 .
・（口）「公開シンポジウムオスマン文化の諸相（2002 年度前期日本イスラム協会主催公開シンポ

ジウム「トルコ基層文化とイスラーム」(2002年4月27日、立教大学))」『イスラム世界』61、2003年9月、55～57頁.

・（彙）「研究室ニュース明大図書館に「トルコ文庫」誕生！」『明大アジア史論集』9号、2003年3月、87～89頁.

2004年

・（論）Bir Âyanın Doğuşu: Karaosmanoğlu Hacı Mustafa Ağa'ya Ait Belgeler, *Belgeler*, XXV-29, Ankara, 2004, pp. 1–72.（Feridun Emecen と共著）

・（論）「トルコにおける「公定歴史学」の成立―「トルコ史テーゼ」分析の一視角―」寺内威太郎・永田雄三・矢島国雄・李成市『植民地主義と歴史学―そのまなざしが残したもの―』刀水書房、2004年、107～233頁.

・（口）「トルコ―イスタンブルの町づくり―（平成15年度秋季東洋学講座講演要旨、第478回、2003年10月28日）」『東洋学報』第85巻第4号、2004年3月、106～108頁.

・（彙）「蔵書の玉手箱「トルコ文庫」へようこそ！」『図書の譜』8号、2004年3月、11～24頁.

2005年

・（論）Ayan in Anatolia and the Balkans during the 18th and 19th Centuries: A Case Study of the Karaosmanoğlu Family, Antonis Anastasopoulos ed., *Provincial Elites in the Ottoman Empire, Halcyon Days in Crete V: A Symposium Held in Rethymno 10–l2 January 2003*, Rethymno: Crete University Press, 2005, pp. 269–294.

・（論）「18世紀トルコの地方名士ハジ・ムスタファ・アガに関する新史料」『明治大学人文科学研究所紀要』56号、2005年3月、167～l84頁.

・（研）「『イスラム世界』と地中海地域」『明大アジア史論集』10号、2005年3月、3～28頁.

・（エ）「「イスラム世界」と「ヨーロッパ」の相互浸透性:ヨーロッパ中心史観の克服に向けて」『じっきょう地歴・公民科資料』60、実教出版、2005年2月、12～15頁.

・（エ）「世界への視点　トルコのEU加盟は可能か―歩み寄る心と心―」『ジェトロセンサー』55-661、2005年12月、4頁.

・（口）「「イスラム世界」と地中海地域明治大学文学部特別企画シンポジウム報告」『東洋史からアジア史へ―変わる世界史、広がるアジア―』、2005年3月、7～11頁.

2006年

・（単）*Tax Farm Register of Damascus Province in the Seventeenth Century: Archival and Historical Studies*, Tokyo: Toyo Bunko, 2006, 488p.（三浦徹、清水保尚と共編）

・（論）「オスマン帝国末期イスタンブルの演劇空間―ポスター資料の分析を中心に―」『駿台史学』129号、2006年12月、105～128頁.

・（エ）「シルクロード人物伝26スレイマン一世」『週刊シルクロード紀行　アナトリア（トルコ①）』No. 26, 2006年4月、18～19頁.

・（エ）「イスラム世界を歩く(1) 空腹にしみわたる一切れのパン」『明治』30号、2006年4月、70～73頁.

・（エ）「イスラム世界を歩く(2) 鍛冶師の村からきた友」『明治』31号、2006年7月、54～57頁.

・（エ）「イスラム世界を歩く(3) 急がば回れ―歴史資料調査の現場から―」『明治』32号、2006年10月、52～55頁.

・（彙）「『トルコ文庫』の由来と概要」『明治大学図書館所蔵トルコ文庫目録』明治大学図書館、

2006 年、iv～vi 頁 .

2007 年

・（エ）「イスラム世界を歩く（最終回）聖者になった？民族の英雄―アルバニアの旅から」『明治』33 号、2007 年 1 月、52～55 頁 .

2008 年

・（論）“Son Dönem Osmanlı İstanbul'unda Tiyatro”, *Türklük Araştırmaları Dergisi*, 19 (2008), pp. 327–346.

・（研）「トルコ史研究最近の動向から」日本・トルコ協会（編）『日本・トルコ協会史：追捕 1996 年度～2006 年度』、日本・トルコ協会、2008 年、37～48 頁 .

・（研）「＜座談会＞トルコとは何か」『別冊環⑭トルコとは何か』、2008 年 5 月、6～47 頁 .（澁澤幸子・三木亘との対談）

・（書）「書評　読書空間：『激動のトルコ』内藤正典編著」『論座』159 号、2008 年 8 月、327 頁 .

2009 年

・（単）『前近代トルコにおける地方名士―カラオスマンオウル家の研究』刀水書房、2009 年 .

2011 年

・（エ）「バルカン諸国の歴史―オスマン帝国の遺したもの」*Civil engineering consultant* (250)（特集土木遺産（9）バルカン諸国／多民族地域における土木文化）、2011 年 1 月、12～17 頁 .

・（エ）「トルコのことわざと歴史教育」日本ことわざ文化学会（編）『教育とことわざ』人間の科学社、2011 年、82～94 頁 .

2012 年

・（単）『トルコを知るための 53 章』明石書店、（大村幸弘・内藤正典と共編）、2012 年 .